論文審査結果の要旨

氏名　志内一興

本論文は、ローマ帝国支配層の意志・命令が、どのように被支配住民の前に現れ、被支配住民はそれに対してどのように反応したか、という問題を主題に据え、ローマ帝国支配の本質をコミュニケイション論の立場から解明しようと試みたものである。ローマ帝国が命令をいかに発し、それを伝達し、その内容の周知をはかり、他方、住民はそれをいかに受容し、服従し、さらには活用したかという論点が、豊富な一次史料の分析を通して明らかにされる。

著者は、ローマ帝国が各地に命令を伝達する際に活用した「公文書」の存在に着目し、その発給・伝達、および帝国住民のそれに対する反応と活用の諸相を分析する。著者によれば、皇帝の意志でありそのままの形でローマ帝国の唯一の法源となった勅法のうち、最大多数を占めるスブスクリプティオおよび布告文書は、多くが金石文による掲示という形で公開され、あるいは利害当事者が私的にそのコピーを作成するという形で伝達された。また読み書き能力が近代に比べて低かった当時においては、こうした公文書を「読み上げ」という形で一般民衆に知らしめたことも、公開の重要なチャンネルとして無視できない。帝国は公開の原則に則って文書を通じその意志を発信する。一方、帝国住民は、皇帝や総督に直接陳情するルートを通じて自身のおかれた苦境を説明することができ、また帝国はそれに対し、その内容をすべて公開するという形で回答を提示する。こうした双方向コミュニケイションのシステムが存在したがゆえに、ローマ支配の永続性が確保された、と著者は結論する。

本論文は、広大な版図を擁したローマ帝国の長期にわたる支配の継続を可能ならしめたものとして、支配者・被支配者間のコミュニケイションという要因に着目した点において、高い独創性を有する。とくに近年におけるローマ帝国研究のパラダイム転換、すなわち、ローマ帝国支配の本質を上からの支配・強制・搾取にではなく、被支配住民からの権力へのアプローチを内包するものとしてみる新しい観点と相呼応している点に、最新の研究動向への本論文の貢献を認めることができる。

表現方法や議論の進め方などに一部未熟な点が散見され、また被支配住民のメンタリティーの分析が不十分ではあるものの、問題意識は首尾一貫しており、一次史料の実証的な扱いも信頼が置けるもので、本論文は博士論文としての水準に十分達しているものと認められる。とくにこれまで光を当てられなかった皇帝や総督の布告文書を広範に渉猟し整理したことは、高く評価される。

よって審査委員会は、本論文が博士（文学）の学位に値するとの結論に達した。